

北区飛鳥山博物館だより
2023.9.20

ほいす 51

北区貝塚物語

—とある少年が見た、
おどろきの縄文ワールド—



秋期企画展

観覧無料

会期：令和5年10月24日(火)～12月10日(日)

開館時間：午前10時～午後5時

休館日：毎週月曜日

会場：北区飛鳥山博物館 特別展示室・ホワイエ

秋期

企画展

北区貝塚物語

—とある少年が見た、おどろきの縄文ワールド—

現在よりも温暖な気候だった縄文時代中期～後期初頭（今から約4000～5000年前）、北区の低地には穏やかな海が広がっていました。その海では、貝類の採取が盛んにおこなわれ、区内各所に貝塚がつけられました。

本展では、現代からタイムスリップした少年「タロウ」の視点をもとに、日本最大の規模を誇る中里貝塚（上中里2丁目）や近年新たに発見された栄町貝塚（栄町5番地）など、北区の貝塚にまつわる縄文人の暮らしについて紹介します。

みなさんもタロウといっしょに、びっくり！な縄文人の暮らしをのぞいてみませんか。



最大で4.5mもの厚さになる貝層（中里貝塚）

関連イベント 詳しくはお問い合わせ下さい。※電話 03-3916-1133

- 1) 企画展示解説会
秋期企画展の内容を展示担当者が解説します。
日時>11月19日（日）
[第1回] 午前11時～正午
[第2回] 午後2時～3時
会場>特別展示室・ホワイエ
講師>当館学芸員
定員>各回20名（当日先着順）
費用>無料
申込>不要 ※各回、開始30分前より整理券配布。
- 2) 秋期企画展特別講演会
最新の調査成果を交えながら、北区の貝塚についてお話しいただきます。
日時>12月3日（日）午後2時～4時
会場>講堂
講師>植月 学 氏（帝京大学文化財研究所 准教授）
定員>60名（抽選）
費用>100円（資料代）
申込>往復はがき または 電子申請
11月21日（火）午後4時必着
電子申請受付開始日：10月12日（木）
- 3) 北区遺跡学講座 2023 Special「中里貝塚と栄町貝塚」
中里貝塚と栄町貝塚について、博物館内で座学を行ったのちに、現地を見学します。
日時>12月10日（日）午後1時30分～4時30分（予定）
会場>講堂・野外（栄町5番地～上中里2丁目）
講師>当館学芸員
定員>25名（抽選）
費用>100円（資料代）
申込>往復はがき または 電子申請
11月28日（火）午後4時必着
電子申請受付開始日：10月19日（木）

Voice 「文化財…保存も活用も」

「保存：もとの状態をたもって失わぬこと。現状を維持すること。活用：活かして用いること。効果のあるように利用すること。（広辞苑より）」

文化財の保護や博物館等での展示は、保存と活用、常にこの2つのバランスを考えることが求められます。決して対立する概念ではないのですが、こと文化財では足して2で割るような対応は出来ません。私たち学芸員は、企画展であれば、資料のために望ましい展示方法を検討します。資料に影響を与えない展示期間で、照度・温湿度はどの位か、ケースでおおうか等を考えてプランを練ります。建造物や史跡といった規模の大きな文化財の活用・公開でも同様です。どのような整備や修理を行えば、その文化財の価値を損ねない修理や整備になるのか、公開・活用に必要な照明器具・トイレなどの設備をどう設置するのか等を慎重に見極め、場合によっては、専門家の意見を聞き計画を実行していきます。

こうした検討・確認作業は、公開や活用を最優先で考えると煩わしい事かもしれませんが、文化財の価値が保たれることで、見学者（利用者）は、その価値に感動します。長く文化財の価値が保たれ、それを知る人が増えれば、その文化財を永く伝えていくことへの応援になるはずです。

近年は文化財の活用を地域振興につなげる方策を模索する自治体も増えています。見学者（利用者）が文化財の本当の魅力に触れる最高の機会を作ることがますます必要になってきています。（山口）

モノの記憶

— 収蔵品が語る物語 —

「御殿前遺跡出土の地鎮関連遺物」

昭和57年（1982）より始まった御殿前遺跡の第1次調査（農業技術研究所跡地）において、「特殊遺構」と呼ばれる遺構から、写真に見える土器が出土しました。これら4つの土器はすべて土師器で、奥左が広口壺形土器、奥右が高坏形土器、手前左および右が坏形土器です。土器の特徴などから、7世紀第3四半期頃の土器であると推定されます。

「特殊遺構」は直径3m、深さ2mほどの掘鉢状に掘り込まれた土坑で、覆土の下層から白色粘土の堆積が確認されています。この白色粘土は人為的に埋めたものと考えられ、何か特別な遺構であることを感じさせます。

さらに、出土した4点の土器に注目すると、奥右の高坏形土器および手前右の坏形土器の内面には暗文と呼ばれる放射状や渦巻き状の線が確認でき、その特徴から畿内産土師器であることがわかります。つまり、在地で作られた土器ではなく、当時の都周辺で製作され持ち込まれた土器なのです。また、奥左の壺形土器も丁寧な作りで、外面および内面の一部が赤彩されています。このような土器群は一般的な竪穴住居などから出土することはほとんどなく、遺構の特殊性を如実に表しています。

上記のような遺構の状況および土器の特徴から、この「特殊遺構」は豊島郡衙創設期に地鎮祭を執り行なった遺構であると考えられています。現代でも行なわれている地鎮の儀が古代においてすでに実施されていたことを、遺跡を通してこれらの土器は伝えてくれます。（高坂）



御殿前遺跡 特殊遺構出土土器

写真に見るあの日、あの時

「M.KURODA、関東大震災の岩淵町を写す」

100年前の大正12年（1923）9月1日、関東大地震が発生しました。北区域では、東京下町に比べ火災被害は少なかったものの、工場や家屋の倒壊で多くの被災者が出ました。『北区史 通史編近現代』の関東大震災の項には、被災者救援の様子を写した写真3点が掲載されています（236頁）。その中の一枚が「宝幢院境内での救援米配給」です。

写真右下に「M. KURODA 市外赤羽」と印字されています。赤羽にあった黒田写真館の撮影でしょうか。カメラは、積まれた米俵とテント内で米を配給する様子を写しています。岩淵町では、4か所の配給所を設置し、青年団、在郷軍人分会、消防組等が配給に従事しました。テント内で記録をつけながら米を配給しているのが青年団員たちのようです。米を受け取りに集まっているのは多くが女性ですが、少年の姿も交じっています。成人男性が受け取りにきている姿はありません。男性たちは、倒壊した家屋や道路の片づけにあたっているのでしょうか。米を受け取りに来た少年の母は、父とともに家で作業しているのでしょうか。



写真は、袋の中の米を確かめる女性と、布袋を手にして順番を待つ少年を中央に据えます。撮影者の「がんばれ」という声が聞こえてくるようです。（田中）

写真は、袋の中の米を確かめる女性と、布袋を手にして順番を待つ少年を中央に据えます。撮影者の「がんばれ」という声が聞こえてくるようです。（田中）

王子駅から徒歩5分ほど、黄色い外壁に赤い看板が目をつけた「スーパーほりぶん」…。平成25年(2013)に閉店するまで王子のシンボルの一つだった同店を覚えている方も多いのではないのでしょうか。

この春の企画展の主演となったのは、その「スーパーほりぶん」から当館に寄贈されたチラシです。同店のチラシは昭和37年(1962)の新装開店時から閉店前年まで残されており、なかでも昭和30～40年代のチラシには、時代性が色濃く反映されています。

そこで、本展では高度経済成長期に焦点を絞り、「1章 スーパーの時代到来」では「総合食品 堀文」が当時急成長していたスーパーへと転換するまでを紹介。「2章 I♥スーパー 昭和のお買物歳時記」で、チラシを通して1月から12月まで当時の季節の行事や催事をたどりましました。続く「3章 スーパー・チラシとたどる昭和の暮らし」ではチラシと立体資料を年表と並行して展開し、「4章 うつりゆく街・店・人」で「スーパーほりぶん」が閉店に至るまでを伝えました。

また、展示室前のホワイエでは「立体写真館〈昭和の北区〉懐かしの街・店・人」と題して、昭和20～40年代の北区の商店街の写真を大きく引き伸ばし、昭和の香りが感じられる空間としました。写真館の一角には商店街やスーパーの思い出を書き記すメッセージ・ボードも設置しました。

アンケートでは「スーパーマーケットのチラシがこんなにも面白いとは思わなかった。1枚1枚に歴史があり、当時の人々の気持ちになりながら楽しめた。」「展示もさることながら、展示場にいらした方の思い出話をとても楽しく聞きました。」など、チラシの面白さ、懐かしさ、また「スーパーほりぶん」の思い出を語る声が多く聞かれました。さらに、SNS上で紹介して下さる方も多く、徐々に来場者が増えて、最終的には17,816人にご覧いただきました。



展示室内



ミニ講座

関連イベントとしては、展示解説(4/29)とミニ講座「〈昭和のスーパー風物詩〉ちんどん屋がやってきた！」(3/25)を開催。ミニ講座当日はあいにくの雨でしたが、博物館入口前での公開実演に多くの方が足を止めて聞き入り、講座ではちんどん屋の歴史・音楽の解説と実演をたっぷり楽しんでいただきました。

これまでスーパーのチラシは博物館で取り上げられたことはなく、ある意味、大きな挑戦でしたが、本展を通して街にエネルギーが溢れていた時代、店と人との信頼しあっていた時代を振り返る機会としていただけたならば大変嬉しく思います。(久保埜)

北区飛鳥山博物館開館 25 周年記念事業

令和5年（2023）3月27日に、おかげさまで当館は開館25周年を迎えました。それを記念し、2つの展示を行いました。展示の手法は違いますが、どちらも25年という歴史を積み重ねてきた「今」の博物館の姿を紹介するような展示となったのではないかと感じています。これからもご来場いただきました皆様に楽しんでいただけるような展示を開催すべく、日々精進してまいります。（谷口）



1. スポット展示「ASUKAYAMA セレクション 25」

（会期：5月27日～6月25日）

例年初夏、収蔵資料の中から5点を選んで紹介する「ASUKAYAMA セレクション 5」の特別版として開催しました。

本展の資料数は、その名の通り例年の5倍の量の「25」点。当館学芸員、総勢10名がこの展示にふさわしい「とっておき」の資料を2～3点選び、それぞれの見どころなど、その資料が紡ぐ「物語」をご紹介しました。例えば、縄文時代の土器や大正時代の女兒用マントなど…今年もバラエティ豊かな資料を展示いたしました。「25」点というその数からか、例年以上に「いろいろなものを見ることができて楽しかった。」というお声が聞かれたような気がしています（笑）。

展示担当の発案当初の想像をはるかに上回る大規模展示となった本展、総勢4,228名の方にご来場いただきました。



2. パネル展示「おかげさまで25周年

北区飛鳥山博物館の歩んできた道、歩む道」

（会期：5月27日～12月27日）

開館して25年。その歴史の中で行われた、さまざまな事業をパネルで振り返りつつ、これからの博物館に向けて現在行っている新たな試みを紹介する展示です。

パネルでは、過去の講座や講演会の様子を撮影した写真なども展示しています。来場されたお客様からは「もう25年になるんだ！」や「懐かしい。」といったお声をいただく一方で、「こんなことをしていたんですね。」というような声も聞かれ、博物館としても「過去」「現在」「未来」の当館を見つめなおす、良い機会となりました。

本展は、今年の12月27日（水）まで3階閲覧コーナーにて開催しています。ぜひご覧いただき、これまでの博物館、そしてこれからの当館の進む道に思いを馳せていただけましたら幸いです。



天地・水・人

「公園となった飛鳥山」

佐々木 優（当館学芸員）

京浜東北線の車窓から王子駅方向を眺めていると、建物がひしめく街の中に浮島のような飛鳥山が見えてくる。武蔵野台地と石神井川の流れによって形成されたこの場所は、はるか昔から人々が暮らし、近世以降は気ままに時間を楽しむ行楽の地として長い歴史を刻んできた。

そんな飛鳥山は今年、日本で初めての近代公園のひとつに指定されて150年を迎えた。今回はせっかくの機会なので飛鳥山「公園」の始まりを紐解いてみたい。

飛鳥山が広く一般の人々に親しまれる桜の名所となったのは江戸時代中期に遡る。8代将軍徳川吉宗の飛鳥山整備以降、江戸近郊の人々は飛鳥山とその周辺一体を北郊の行楽地として楽しんだ。

明治維新を迎え、社会の変化とともに飛鳥山を取り巻く環境にも変化が訪れることとなる。明治6年(1873)1月15日に太政官が府県へ宛てた太政官布告第16号を受け、東京府は飛鳥山など5カ所を日本初の近代公園として指定。しかし、この指定によって飛鳥山は急速に近代公園化されたわけではなかった。それどころか、ほとんど手つかずのまま、明治10年代初頭までには崖下にできた工場の煙によって桜が枯死し、桜の名所としての面影を失ってしまったという。結局、植栽の管理をはじめとする公園整備が、所管の東京府によって本格的にはじめられたのは明治13年(1880)のことであった。整備によって往時の桜の名所としての賑わいを取り戻した飛鳥山公園であったが、「公園」の実態は太政官が目指した欧米風の都市公園とは程遠く、むしろ近世的な雰囲気を残すような整備がなされた。そこには飛鳥山公園の設計を手掛けた東京府・土木掛の長岡安平の考えが反映されており、近世以来の「遊園」としての姿をとり戻すべく、樹木の植栽を重点的に行ったと考えられる。近代公園として名を変えた飛鳥山は、戦前期に差し掛かるまでの間、近世的な趣の残る中で花見ができ、桜の季節以外は近代の身体技法である運動会が行われ、崖下には鉄道が走り工場の煙がたなびくという、近世と近代がマーブル模様のように混在する空間だった。

戦時体制下になると、飛鳥山公園に残った遊園的な姿は、運動広場の造成や崖の中腹に作られた防空壕によって、少しずつ姿を変えていくことになるのだが、この時期に関する公園の様子はまた稿を改めて紹介したい。(なお、防空壕については、『ぼいす 39』「大地・水・人」を参照。)

戦後、飛鳥山公園が東京都から北区の所管となったのは、昭和40年(1965)になってからのことである。当



飛鳥山公園 (1972年頃)

時の北区ニュースには「カラームードの大噴水やリトルディーズニerland、往時をしのぶ桜の園に一区立飛鳥山公園整備計画がなる」として人々が楽しめる公園になるよう期待をよせる記事が掲載された。花見の名所として開かれて約300年、そして公園となってからは150年、北区立公園としては約60年。これからも飛鳥山は、人々の暮らしとともに変わらずにこの場所であり続けるのだろう。

次の時代にここから見える景色は、一体どのようなものになるのだろうか。



北区役所広報課発行「北区ニュース」
昭和40年11月10日号
(北区役所広報課所蔵)

北区飛鳥山博物館の常設展示室の一番奥、そこには何が展示されているかご存知でしょうか。ここには、かつて志茂に建っていた「水塚」の母屋、物置の一部が再現されています。この物置の周辺や内部には、区指定有形民俗文化財の一つ「旧下村岩井家生活用具」が一部展示されています。岩井家は、明治から昭和の初めまで農業を営む一方、大正2年(1913)から昭和6年(1931)にかけておこなわれた荒川の河川改修工事にも関わっていました。そのため、総点数215点にのぼる岩井家の生活用具は、クワやムギウチハシゴなど農業用の生産用具のほか、シャベルや天秤棒など河川用の工事用具、用心舟やハシゴなど荒川の水害に備えるための用具、地域の名産であった製茶道具などが含まれており、旧荒川流域周辺の地域における人々の生活や地域の特徴をよく示しています。

この岩井家生活用具は、寄贈を受けるときにその収納状況についても調査をしています。つまり、物置のどこに、何が、どのように置かれていたかの記録です。私たちが、よく使うものを引き出しの手前にしまうのと同じように、収納スペースの配架秩序は、その家のくらしを考えるうえで、重要な情報なのです。岩井家では、物置の一階天井の太い梁に、水害用の用心舟を逆さまにして下げ、舟の内側にヤスやツリザオなどを一緒に下げていたそうです。常設展示室では、このような収納方法も、一部再現していますので、ぜひ注目してください。(工藤)



東京都北区有形民俗文化財
「旧下村岩井家生活用具」

北区の文化財紹介

博物館インフォメーション

◆人物往来

平成30年4月から館長に就任していた野尻浩行が3月31日付で退職となり、後任に前教育振興部生涯学習・学校地域連携課長の坪井宏之が着任いたしました。

また、同じく3月31日をもちまして、開館当初より歴史分野を担当してきました石倉孝祐学芸員が退職いたしました。これまでのみなさまのご温情ありがとうございました。

◆博物館実習生が大活躍！

8月1日(火)～13日(日)まで、博物館学芸員資格の取得を目指す実習生4名を受け入れました。今年も夏休みわくわくミュージアム★2023の催し物準備を中心として、常設展示室の解説パネル作成や展示設営、SNSでの情報発信、ミュージアムグッズの作成など、さまざまな博物館の業務に携わりました。みなさん、猛暑が続く中お疲れ様でした！

◆北区の昔を伝える資料や写真を探しています！

当館では、北区内で使用された生活用具や、区内の撮影した写真など、昔の暮らしがわかる資料を探しています。「こんなものでいいのかしら？」という方も、ぜひ当館までご一報ください！(TEL:03-3916-1133)。皆様のご連絡をお待ちしております。



